

仙台藩の舟の道

仙台市博物館 学芸企画室 佐々木 徹

第5回

仙台をつくった川・堀・湊

初代藩主伊達政宗は、慶長六年（一六〇二）から開始した仙台城と城下の建設にあたって、水運機構の整備も推し進めました。その建設に多くの物資輸送が必要とされたからです。

そこで政宗は、輸送経路として広瀬川と名取川、名取川の河口に位置する閑上湊（名取市）に着目します。藩内各地の米や材木などを閑上湊に集積し、名取川・広瀬川を舟で上って仙台城南郊の舟町（若林区舟丁）まで運ぶルートです。

また政宗は、閑上湊がある名取川河口と蒲崎湊（岩沼市）がある阿武隈川河口を結ぶ運河も開削しました。木曳堀です。江戸時代には「内川」「内堀」と公称されていますが、阿武隈川流域の材木類の輸送路として多く利用されたため、木曳堀とも称されたといえます。

広瀬川・名取川・木曳堀が重要な舟の道として機能したことで、閑上湊は仙台城下の外港として賑わい、仙台の城と町を築き上げる建設ラッシュを支えたのです。

舟入堀・舟曳堀と塩竈湊

古くから太平洋沿岸部の良港として知

られた塩竈湊（塩竈市）は、仙台城下へ至る主要な道のりが陸路のため大量輸送に限界があり、江戸時代はその輸送路の強化が課題の一つでした。

そこで十七世紀後半頃（四代藩主伊達綱村の治世）に開削されたのが舟入堀と舟曳堀です。舟入堀は、塩釜湾口の牛生（塩竈市）と七北田川河口部の蒲生（宮城野区）を結ぶ約七キロメートルの運河です。舟曳堀は、七北田川沿いの鶴巻（同区）と塩竈街道の脇道（現在の国道四五号）沿いの苦竹（同区）を結ぶ約五キロメートルの運河です。蒲生・鶴巻・苦竹には、それぞれ御蔵（藩の蔵場）などが設けられ、荷の積み替えが行われました。苦竹から仙台城下の東隣にある原町（同区）の御蔵までは、前述の脇道を使った約二・五キロメートルの陸路でした。

さらに七北田川の改修工事も行われ、仙台城下へいたる新たな舟の道が整備されたのです。ただし、運河の開削によって塩竈湊へ立ち寄らずに蒲生へ直接向かう舟が増え、かえって蒲生が賑わいをみせたため、仙台藩は貞享二年（一六八五）、すべての舟に塩竈湊への着岸を命じる振興策を打ち出しています。

北上川の舟運と石巻湊

同じく古くから水運の要であった北上川と石巻湊についても、仙台藩は改修・整備を進めています。

政宗の時代から北上川流域では新田開発が盛んに進められ、治水や安全な航行のための河川改修も行われました。石巻湊には米・大豆・材木などを集荷する御蔵が設置され、他藩の蔵も設けられていきました。穀倉地帯の内陸部からやってきた舟は多くの物資を石巻湊まで運び、のちにそれらは塩竈湊や江戸などへと回漕されたのです。

そのなかで特に重要だったのが、江戸へ米を送る廻米です。仙台藩は寛永十一年（一六三四）、藩の管理下で江戸廻米を行うことに決め、以後、藩の重要な財源となり、藩米は長く江戸の台所を支えました。



『奥州仙台領国絵図』（1645年）に描かれた仙台城・広瀬川・名取川・木曳堀・阿武隈川など 写真提供・仙台市博物館

旬の常設展2020 秋・冬

特集展示 福島美術館の優品

12月1日(火)～2021年1月31日(日)

資料名(各部分) 左:若衆・花魁図(花魁図) 志岡三千子筆、
右:四季の花図 熊耳耕年筆 ※全て社会福祉法人 共生福祉会 所蔵

秋 「奥羽の戦国大名」ほか
▷12月20日(日)まで

冬 「特集震災10年—
災害を生きた人々」ほか
▷12月22日(火)～
2021年3月21日(日)

【観覧料】一般・大学生 460円、高校生 230円、小・中学生 110円
※新型コロナウイルス感染予防のため、ご来館の際にはマスクの着用にご協力をお願いします。

仙台市博物館
SENDAI CITY MUSEUM

▶12・1月の休館日 毎週月曜日(1/11は開館)、年末年始(12/28(月)～1/4(月))、1/12(火)
▶博物館ホームページ [仙台市博物館](#) 検索 [※開館状況など最新の情報は、博物館ホームページをご覧ください。](#)
▶博物館ツイッター @sendai_shihaku

▶開館時間 9:00～16:45(入館は16:15まで)
〒980-0862 仙台市青葉区川内26番地(仙台城三の丸跡) TEL:022-225-3074